

学際的な研究における心理学の役割

国立研究開発法人国立長寿医療研究センター
NILS-LSA 活用研究室 研究員

西田裕紀子 (にした ゆきこ)

NILS-LSA とは

国立長寿医療研究センターは、高齢者の心と体の自立を促進し、健康長寿社会の構築に貢献するという理念のもとに、診療と研究を行っている機関です。私は、その中のNILS-LSA活用研究室という部署に勤務しています。NILS-LSAとは、「国立長寿医療研究センター・老化に関する長期縦断疫学研究 (National Institute for Longevity Sciences - Longitudinal Study of Aging)」というプロジェクトの呼称です。1997年、日本人中高年者の加齢のプロセスや、老年病の要因を解明することを目的として開始されました。対象は、センター近隣にお住まいの方々から無作為に抽出された中高年者2,300名で、2年に1度センターにお越しいただき、さまざまな検査・調査を受けていただいています。2012年までに全7回の調査を終了し、2013年からは、少し項目を絞って8回目の調査を行っています。たとえば、1回目の調査時点で60歳の方は、8回目の調査では76歳になられています。NILS-LSAでは、この間の加齢の進行過程を、詳細に、経時的に観察し、記録しているのです。

心理学研究者の仕事

NILS-LSAの検査・調査の項目は、医学、運動生理学、栄養学、心理学と、多岐にわたっています。私が担当する心理学領域では、知能検査、認知症スクリーニング検

査、抑うつや生活満足感等の心理的健康、ライフイベント、ソーシャルネットワーク等の日々の生活に関する調査を行ってきました (詳しくは、国立長寿医療研究センターNILS-LSA活用研究室HPをご覧ください)。

心理学研究者の重

要な仕事は、まず、心理調査の項目を決めることです。特に、全ての調査で一貫して測定する基幹項目に関しては、標準化されていて、国外の研究結果も多く、心理学以外の領域でも説得力のある検査・尺度を選択してきました。また、NILS-LSAでは、臨床心理士や心理学専攻の大学院修士の方々に面接を担当していただいています。全スタッフが均質に知能検査や聞き取りを施行できるように、1~2カ月の事前研修を行います。そして、収集されたデータを綿密にクリーニングし、できる限り精度が高く、他領域の研究者も使いやすい心理データベースの構築を目指しています。長期的なデータが蓄積されてきた現在、これらを有効に活用し、心理的側面の加齢のプロセスやその要因を明らかにしていくこと、それを広く情報発信していくことが急務となっています。

学際的な研究での心理学の役割
学際的というのは、諸科学が

Profile—西田裕紀子

2003年、名古屋大学大学院教育発達科学研究科心理発達科学専攻博士後期課程満期退学。専門は生涯発達心理学。論文は「成人期・老年期における発達研究の動向」(教育心理学年報)など。



研究室にて

総合的に協力し合うことです。NILS-LSAにも、医学、栄養学、運動生理学などの、多くの学問領域の研究者が関わっています。このことは、さまざまな要因が影響し合って進行する、人のエイジングを検討する際には、非常に大事なことです。現在、NILS-LSAでは、食生活による認知症予防、抑うつと運動習慣、難聴と知能低下など、心理データを組み込んだ研究が多く行われています。その中で、心理的指標の解釈や、潜在変数を用いた統計手法の提案など、心理学が貢献できる部分が多いことを実感しています。

「健康日本21」等の国が進める政策では、心理的健康の増進がいっそう重視されています。また、身体的・生理的な機能が低下する人生後半期にこそ、心のあり方がより重要になるともいえます。今後も、他の学問領域の研究者の方々とは多分に協力し合いながら、健康長寿社会の構築に役立つ研究を進めていきたいと考えています。